

2013 年度 第 4 回スポじんサロン
発表抄録集

会場：鹿児島大学教育学部

期日：7 月 27 日 14：00～

主催：日本スポーツ人類学会

会場までのアクセス



郡元キャンパス

〒890-8580 鹿児島市郡元 1 丁目 21 番 24 号 TEL : 099-285-7111 (代表)

【市電】郡元行き 工学部前電停下車 谷山行き 騎射場電停下車

【市営バス】9・11・20 番線 (鴨池港行き) 鹿大正門前、または法文学部前下車

会場案内

建物名	教育学部第二講義棟 3階	収容人数	30人	利用可能時間	平日、祝・休日 9時～17時
部屋名	34講義室	面積	47.16㎡	設備等	

研究発表プログラム

内容		時間
開会式		14：00～14：05
研究発表 1	グローバルな健康文化の形成過程 -外国人向けタイ・マッサージ学校の実践と学習に着目して- <div style="text-align: right;">小木曾 航平（早稲田大学）</div>	14：05～14：45
研究発表 2	ブレイクダンスとそのルーツとしてのアフリカの舞踊 -ブレイクダンスのフットワークに関する調査をもとに- <div style="text-align: right;">相原 進，遠藤 保子（立命館大学）</div>	14：50～15：30
休憩		15：30～15：40
研究発表 3	映像にみる南九州のエスニック・スポーツ <div style="text-align: right;">瀬戸口 照夫（鹿児島県立短期大学）</div>	15：40～16：20
研究発表 4	闘牛の日韓比較 <div style="text-align: right;">桑原 季雄（鹿児島大学）</div>	16：25～17：05
閉会式		17：05～17：10

○発表時間 25 分 質疑応答 15 分

発 表 抄 録

グローバルな健康文化の形成過程 ー外国人向けタイ・マッサージ学校の実践と学習に着目してー

小木曾 航平（早稲田大学）

発表要旨

本発表は、タイの伝統的健康法と考えられることの多い「タイ・マッサージ」をグローバルな健康文化という枠組みから捉え直し、そこに至る形成過程を民族誌的に明らかにすることを目的とする。その際、本発表ではとりわけ外国人に開かれたタイ・マッサージ学校をその分析対象としていくことになる。発表の構成は以下の通りである。

最初に、本研究が「健康文化」、さらに言えば「グローバルな健康文化」という枠組みを導入してタイ・マッサージを分析することの意義について、医療人類学を中心とした先行研究に言及しながら明らかにしていく。

次に、そうした枠組みを用いることの具体的な社会背景として「スパ」のグローバリゼーションについて述べる。「スパ」は元来、湯治場の意味であったが、現在ではこの言葉が示す対象は驚くほど広がっている。このスパの変容とタイ・マッサージのグローバル化は無関係ではないことを明らかにしていく。

最後に、タイ・マッサージ学校におけるタイ・マッサージ学習がいかに行われ、そこでの実践がどのようにしてタイ・マッサージをグローバルな健康文化へと形成させしめているのかを民族誌的手法によって明らかにしていく。

参考文献

- 飯田淳子（2006）タイ・マッサージの民族誌ー「タイ式医療」生成過程における身体と実践。明石書店：東京。
- 瀧澤利行（1998）健康文化論。東京：大修館書店。
- Laing, Jennifer and Weiler, Betty. 2008. Mind, Body and Spirit: Health and Wellness Tourism in Asia. In *Asian Tourism: Growth and Change*, Cochrane, Janet, ed.. Amsterdam: Elsevir, 379–389.
- Smith, Melanie and Puczkó, László. 2009. Health and Wellness Tourism. Oxford: Elsevier.

ブレイクダンスとそのルーツとしてのアフリカ舞踊 ーブレイクダンスのフットワークに関する調査をもとにー

○相原進（立命館大学）

遠藤保子（立命館大学）

発表要旨

本報告の目的は、ブレイクダンスと、そのルーツであるアフリカの伝統的な舞踊との関係を考察することである。これまで報告者たちは、ガーナやナイジェリアにおいて、アフリカの舞踊とブレイクダンスとの関係について調査を進めてきた。その成果の一部は、2013年2月の「スポじんサロン in Seoul」で公表した。

ブレイクダンスは、アメリカのニューヨークで誕生した。初期のブレイクダンスの舞踊家は、奴隷としてアフリカからアメリカに連れてこられた黒人の子孫であった。今年2月の報告では、アフリカの舞踊とブレイクダンスについて、舞踊動作に同様のものや類似したものが存在すること、舞踊家の「大地との一体感」「舞踊を通じての戦い」という感覚が同様であることなどから、アフリカの文化が、ブレイクダンスに反映されていることを明らかにした。

報告者たちは、2013年2月から3月にかけて、ガーナ国首都アクラにて追加調査を行った。調査を行うにあたり、ブレイクダンスの黎明期の資料や、これまでの調査結果をもとに、ブレイクダンスにおけるフットワークに着目する方針を採った。フットワークには6種類あり、日本にて6種類の舞踊動作を収録した映像を用意した。ガーナでは、これらの映像を舞踊家3名に見せながら、フットワークとガーナの舞踊との同一性や類似性について聞き取り調査を行った。

聞き取り調査を通じて明らかになったのは、6種類のフットワークの中には、ガーナの舞踊動作と同じものや、類似したものがいくつか存在するということである。ブレイクダンスのフットワークには、「一歩」から「六歩」まで、ステップの数に応じた名前が付けられている。これらのうち「一歩」は、ガーナの舞踊動作のひとつであるアロコト Alokoto と同様で、「四歩」や「六歩」が、舞踊アジヨボ Adzogbo の舞踊動作と類似していることがわかった。また、それぞれのフットワークへの導入の際に行うステップも、ガーナの舞踊動作であるフンベフンベ Fumefume と同一であることが判明した。

報告では、映像をもとに、ブレイクダンスのフットワークとガーナの舞踊動作との比較を行う。また、アフリカの伝統的な舞踊が現在のブレイクダンスに取り入れられる中で、舞踊の意味や社会的背景について、残存したものと変化したものが何なのか考察を行う。

アフリカは、人類の起源の地でもある。アフリカの伝統的な舞踊と、現在の舞踊のひとつであるブレイクダンスとの関係を考察することは、舞踊の起源、舞踊の伝播、今日の舞踊について、より深く理解するための手がかりとなるであろう。

映像にみる南九州のエスニック・スポーツ

瀬戸口照夫（鹿児島県立短期大学）

はじめに

南九州とりわけ鹿児島県、それに隣接する宮崎、熊本両県では、伝統的なスポーツを今日でも実施している地域がある。南九州（鹿児島県）の伝統的なスポーツである綱引、相撲、競漕等を映像で紹介する。鹿児島県は、九州を南下した文化が複合的に存在し、一方、奄美諸島伝いに北上した文化の通過地でもあると言われている。

I 鹿児島県のエスニック・スポーツ

- ・ はま投げ
- ・ 大隅半島のカギ引き
- ・ 金峰町高橋の形相撲（和歌山県由良町の形相撲 エジプト壁画）
- ・ 奄美の舟漕ぎ競争
- ・ 綱引き 綱制作（練り）
- ・ 徳之島の闘牛

II 他県のエスニック・スポーツ

- ・ 熊本県玉名市の大俵ころがし競争
- ・ 宮崎県飫肥の四半的（映像は熊本県八代）

闘牛の日韓比較

桑原季雄（鹿児島大学）

はじめに

2006 年から同僚と 3 人で闘牛研究を開始した。手始めに、徳之島の闘牛大会を観戦し、その後は沖縄、宇和島、山古志、岩手と、立て続けに闘牛開催地に足を運び、調査や資料収集を行なった。闘牛研究のそもそもの発端は、鹿児島大学の島嶼研センターの「薩南諸島の調査プロジェクト」で、共同でシマの研究をしようということになり、モンゴルの牧畜民の研究をしている人類学者と慰霊の研究をしている宗教学者、それに東南アジアの伝統社会の人類学的研究をしている私の 3 人が共同研究チームを結成したことに始まる。3 人とも、闘牛研究とも薩南諸島の研究ともそれまでほとんど接点がなかったが、一人は、家畜研究との関連で、もう一人は東欧セルビアの国際宗教学会に参加した際、偶然闘牛大会のポスターをみたことから、私の方は、もともとから闘牛が盛んな奄美出身者ということで、3 人で闘牛を調べれば何か新しいものが見えるかもしれないという期待があった。

闘牛研究の成果

我々が目をつけたのは、闘牛開催地がすべて、沖縄や徳之島、隠岐といった島嶼や、山古志や宇和島、久慈といった日本の周縁部に位置し、しかも、周縁部に位置するこれらの闘牛開催地が、年 1 回、持ち回りで闘牛サミットを開催し、活発な交流活動を展開しているという事実だった。さらに、2001 年には徳之島の闘牛関係者が韓国で闘牛大会を行ない、韓国の闘牛の活性化につながった。徳之島と韓国清道市の闘牛大会が縁となって、闘牛サミットには韓国の闘牛開催地の関係者も招待されるようになった。つまり、日本の周縁部の闘牛開催地は中央を経由せずに直接、地方同士、そして、地方と外国との交流を活発に行っているのである。我々は、これを「中央—周辺」に対する「周辺—周辺ネットワーク」と捉え、グローバル化の流れに位置づけて考察した。

今後の闘牛研究の可能性

2008 年 4 月に韓国慶尚北道の清道市で闘牛大会の調査を行なった。先行研究もいくつかあることがわかったが、すべてハングルによるものだったため、調査資料もそのままに、研究を中断して今日に至った。今回、大学院の私の指導学生に、韓国の留学生が入学してきたので、その院生に手伝ってもらって、先行研究も少しみながら、5 年前の韓国調査の調査資料と合わせて、闘牛の日韓比較を試みて報告したい。